

しじゅんせつ さばく しりぞとき
《四旬節》—砂漠に退く時—

ふゆ しぜんかい ふか ねむ じゅもく
冬になると、自然界は深い眠りに入ります。樹木
か すがた みる だれ かん
の枯れた姿を見ると、誰もがそれを感じるでしょう。
さまざま き はる なつ うつく みどり は
様々な木は、春から夏にかけて美しい緑の葉を

あき ふか
つけ、秋が深まるにつれて

こうよう いちまいいちまい ふゆ
紅葉し、やがて一枚一枚と冬

は お ほだか
に向かって葉を落とし、裸にな

ち
ってしまいます。冬の間

ち
に散った葉が腐り、春の新しい芽をつ

くき あたら め
ける時まで、木が根から養分を

とき き ね ようぶん
と たくわ
取り、貯えるのです。すなわち、

しぜんかい どうみん せいめい かつどう
自然界の冬眠は、生命の活動

きゅうし あす あたら
の休止ではなく、明日への新し

じゅうじつ せいめいかつどう む
い充実した生命活動に向かっ

しず ふか こきゅう
て静かに深く呼吸し、新しい

いぶ こきゅう とどの
息吹きのために呼吸を整えて

いるかのようです。

ふくざつ もんだい かか いそが まいにち おく
複雑な問題を抱えながら、忙しい毎日を送って

しんこう ひどいき
る私たちは、信仰においても「一息入れる」という心

よゆう ひじょう たいせつ
の余裕を持って生きることが非常に大切なことだと

思います。



なが だせい
「流されている、惰性で生き

じんせい お
ている、人生はそのまま終わっ

ときどき むな
てしまうか。時々そのように空しく

おそ かん
恐ろしく感じる」とおっしゃる方は

お はたら
少なくありません。起きる、働く、

ね く かえ た
寝る…の繰り返しに堪えるため

じかん ゆる かぎ あそ わす
に、時間が許す限り遊ぶ。忘れ

の じんせい
るために飲む。人生のプログラ

ほんとう
ムとして本当にそれだけでいい

のでしょうか。



3月9日「灰の水曜日」をもって、私たちは四旬節に入ります。「四旬節」。その40日を意識せずに過ごしてしまうのか。それとも、それを通して響く呼びかけに耳を傾け、その声に答えるのか。それは私たち一人ひとり次第です。

「四旬節」。聖書の中でその期間の精神をよく言い表している言葉があります。それは「砂漠に退く」ことです。—そのこと自体は決して周りのことや人々との縁を切ることを意味しているのではありません。逆に、もっと深く縁を結ぶために信仰の上で「間を置く」ことです。

・果てしなく続く石だらけ、砂の海とも言える砂漠

・地平線まで氷と雪に包まれている北極

・空に届く紺碧の海

このような景色を見渡す人は、自然の尊さと偉大さを味わいながらも、自分が小さい者で、無力な者だと感じるでしょう。しかし、こんな時こそ

・「飢え」を感じるため、満たされる嬉しさを知り

・孤独を味わうため、人と交わる喜びを求め

・沈黙を経験するため、人に耳を傾ける

この大切さを新たに認識することができるのではないのでしょうか。

「砂漠に退く」人は、人との関係を打ち切りたいどころか、誰よりも充実した出会いと関わり合いを求めています。「間を置く」こと、「離れる」ことが目的ではなく、もっと豊かな関わり合いを結ぶことが目的なのです。神との交わりにおいてなおさらのことです。

町のけたたましい騒音にうずくまると、神の声も

人の声も届かなくなってしまいます。「逃げる」ために「砂漠に退く」ではありません。騒音の中にも小さく響く美しい旋律を聴き取ることができるように心の耳を澄ますためです。今でも神は私たちに語りかけています。その声が届くために、自分の内に静かな「場」を作る、その努力がどうしても必要です。



その努力の支えとして今年も大人のため、3月19日(土)豊津教会、3月20日(日)行橋教会で、小学生のためにも3月26日(土)いやしの家で黙想会が行われます。それに参加することができるために、ぜひ時間を「作る」ことをお勧めしたいと思います。